

小林茂夫

プロレタリア
文学ノート

小林茂夫

ロレタリア

学ノート

小林 茂夫（こばやし しげお）

一九二六年 滋賀県信楽町長野生まれ

一九五四年 岐阜県立武義中学校を経て法政大学文学部卒業

現在、多喜二・百合子研究会運営委員 日本民主主義文学同盟常任幹事

共 著 『小林多喜二読本』（新日本選書）『宮本百合子の生涯と文学』（新日本出版社）ほか

プロレタリア文学ノート

発行 一九八七年六月二〇日

著 者 小林茂夫

発行者 阿部慶司

発行所 (株)青磁社

東京都千代田区神田北乗物町一七北乗ビル 〒一〇一

電話〇三（二五六）八四二五 振替東京四一―一七六一二一

印刷所 新協印刷(株)

定 価 一、二〇〇円

目次

I 文学にみる戦争と人間

泉鏡花『海城発電』 3

江口渙『中尉と廃兵』 6

江口渙『馬車屋と軍人』 8

上司小剣『英霊』 10

越中谷利一『一兵卒の震災手記』 13

プロレタリア文学運動と反戦・反軍国主義小説の系譜 16

II 江口渙

江口渙の文学とその魅力 41

江口渙宛書簡・広津和郎の作家的気魄 45

江口渙宛書簡・宇野浩二、佐藤春夫との友情 50

江口渙の小説世界 54

Ⅲ 宮本百合子

百合子文学における批評の創造力 77

自己変革こそ芸術的眞実の生命 80

“早熟の天才”たち 85

百合子日記 89

自画像としての側面 101

『貧しき人々の群』『風に乗って来るコロポックル』 112

『小祝の一家』 126

『杉垣』『おもかげ』『広場』の波紋 131

Ⅳ 小林多喜二

天皇制権力と対決 145

小林多喜二・その文学 149

多喜二の青春時代 175

V 「ナップ」の新人作家たち

手塚英孝『虱』 183

手塚英孝『小林多喜二』 188

谷口善太郎の文学 190

鈴木清『監房細胞』 208

本庄陸男『石狩川』 210

初出誌紙一覧 215

あとがき 217

I

文学にみる戦争と人間

泉鏡花『海城発電』

近代日本文学史上初の反戦作品

この短編は近代日本文学の最初の反戦反軍作品の一つといわれています。また鏡花の初期代表作の一つに数えられる記念すべき意義をもっています。一八九六年（明治二十九年）一月号「太陽」に発表。「時は恰も日清役直後だ。月琴を弾いても国賊呼ばわりされたり、石つぶてを打たれたりした時代に、作者は敢然としてあやまれる愛国心を非難したのである。（略）当時の知識階級の代表者たる大学生が、就中この作者を讚美したのは当然であろう」（『鏡花世界瞥見』29・3、中央公論）と水上瀧太郎は当時の好評を回想しています。初期の鏡花は理想主義傾向の強い深刻小説や反軍小説を発表しました。

この作品の表題は新聞報道記事にしろされる発信地からとったもので、海城は中国東北地方の鞍山^{あんざん}に近いところ。そこから発信された電報という意味です。

赤十字社の看護員の神崎愛三郎は捕虜になり、日本軍のことはいっさい知らなかったのも何も白状しなかったのですが、ひどい拷問のため赤十字社の内情だけ白状しました。赤十字社の職務

にだけ忠実なかれは、敵軍はもちろん敵国の富豪の病弱な娘まで親切に看護し、彼女からしたわれるほどにつくし、ついに敵軍から感謝状をもらって帰属したのでした。物語りは、そういう神崎の思想と行動自体が「敵に内通」することであり、日本人として「愛国心」のない「国賊」であるときめつける「百人長」（小隊長のこと）の海野という軍人からむごい迫害をうけるという事件をえがいた作品です。

海野は神崎を脅迫するのですが、神崎は冷静な態度をとります。そこで海野は兵士たちに、敵を親兄弟同様に親切にした者にたいして「貴様達は何とする？」といってけしかけます。兵士たちは「国賊逆徒、売国奴、殺せ、撲れ」の怒号をあげせます。それが絶頂にたつたとき、海野は「愛国の志士」を気どって、感謝状を破りするよう神崎に命令します。神崎は、感謝状は自分にとって職務を忠実にはたした名誉のしるしなのだから、みやげにもちかえりたい、とよどみなく答えます。激昂した海野は、兵士に命じて富豪の娘をつれて来させ寝衣のまま神崎の前にひたてさせ、「国賊！」と叫びたてながら、みずからの手で寝衣をびりびりとつんざいてしまったのです。このさわぎをわきで見ていた英国人のジョン・ペルトンは、さらさらと電報をロンドンの通信社に発信します。「予は目撃せり。日本軍の中には赤十字の義務を完して、敵より感謝状を送られたる国賊あり、然れどもまた敵愾心のために清国の病婦を捉えて犯し辱めたる愛国の軍夫（軍人）あり。」と。

この小説は戦場の状況描写に不自然さがありますが、しかし作者は、神崎をとおして博愛主義

的な反軍思想をえがき、狂信的排外主義者の海野をとおして日本軍国主義の強盜的侵略の凶暴性をするどく告発して、今日もなお深い感銘を与える作品となっています。また日清戦争は日本を援助した英国の中国侵略にとって、多大の利益を与えた戦争だったことも、この作品の背景として考えさせられる問題です。（この作品は戦時中の鏡花全集〈岩波書店〉に軍部をはばかって収録されず、戦後、筑摩書房「明治文学全集」の「泉鏡花集」に収録されました。）

江口渙『中尉と廃兵』

戦争犠牲者としてのさびしさ

日露戦争のとき、歩兵少尉で出征し、首山堡の激戦で砲弾に左足をうばわれた信次は、戦功によって中尉に昇進すると同時に、いくつかの勲章や相当の年金と、わずかばかりの恩給をもらい、戦争後の物価高のなかでも、妻子とともにどうやら暮らしました。世間からものはじめは軍人といえは無条件で歓待され、少年雑誌などに戦記をかって文筆上の収入もあるうえに、旧藩主までが、あまり必要でない書記頭という役をつくって優遇したほどで、それで十幾年はわりに楽なくらしができました。

ところが、旧藩主がなくなると人員整理のため書記頭をクビになり、戦記もうれなくなり、それまで銭湯へいっても「名誉の負傷」として戦功ばなしもさせられたのが、すっかり普通のあつかいに変わってきます。信次は戦争の犠牲者としてのさびしさを強く感じはじめたのです。そのころ、信次の部下であった一兵卒の岡井という廃兵（傷痕軍人のこと）がたずねて来ました。岡井も信次同様に村役場をクビになって上京し、日本廃兵救護会には行って行商・押売りをしてい

るのです。廃兵救護会というのは、慈善事業を看板にした行商・押売りのあっせん団体で、高級軍人が経営していました。その事業も行きづまってきているのです。

しかし一兵卒の廃兵にとっては、いっそう詐欺行為と同じようにずうずうしくハミガキやセッケンを押売りしなければなりません。信次はそういう生活の困窮を考えると、はつきりと自分のなかに戦争そのものが「心から呪わしく」なり、反戦を意識するようになるのです。

けれども、岡井らはいっそう貧窮のため、ますますずうずうしく押売りをやり、集団的に脅迫をもって信次のところへ売りつけにやってきました。ついにことわると、岡井たちは廃兵の歌をうたい、どなりちらしていやがらせをするようになり、信次はそのショックで失神状態におちいつてしまいます。

この作品は七十枚くらいの短編で、「新小説」一九一九年（大正八年）二月号に発表されました。作者は、戦後この作品について、「私としてははじめてはつきりと反戦思想をテーマにとらえた作品である」「戦争のために払われた犠牲がいかに無意味なものであるかを示そうとしたものである」（私の歩いた途、一九五五年）と回想しています。作者は、そういうテーマを、軍人の生活問題としてとらえ追求し、また将校と一兵卒との対立という視点のもとに物語りを構成しています。今日読みかえてみると、廃兵問題をとおして、軍人自身のなかにある反戦意識の芽生えをえがいている点で、文学史上の先駆的作品として注目されます。作者はこの作品の前に、軍人の横暴・事大主義を非難した『馬車屋と軍人』という作品も発表しています。

江口渙『馬車屋と軍人』

この作品は第一次世界大戦のさなかに『貴様は国賊だ』という題名で、佐藤春夫らとの同人誌「星座」の一九一七年（大正六年）二月号に発表されました。のち改題、蔵原惟人提唱の日本左翼文芸家総連合編・反戦作品集『戦争に対する戦争』（一九二八年刊）に収録されました。時代の背景は、まだ日露戦争の自慢話が流行していたころのことです。

冬の山国の朝はやく、城下町から峠の坂道を大勢の人が「祝諸君之入営」と書いた大旗を先頭にひるがえし、ぞろぞろと登っていきます。在郷軍人会の会長の退役歩兵佐を先頭にカーキ色の軍服十人ほど、黒木綿の五つ紋付に小倉の袴をはいた元氣そうな若者十二人、そしてがたがたと田舎馬車がつづいています。馬車は峠から十二人の若者をのせて東北線の駅まで送るのです。行列はさらに白や赤や紫や青や桃色の大小とりどりの町の団体旗をはためかしながらつづいていきます。

最後の送別する場所は隣村との境界地点で、右側ががけになっています。そのがけ近くに馬車

屋は中佐の命令で馬車をとめました。出発時間の七時になると、重おもしく中佐が軍人勅諭を土台に軍国主義を謳歌し、老校長が教育勅語を骨子として忠孝仁義を説き、老町長が戊申詔書をもとに勤儉貯蓄をすすめるあいさつを、それぞれ十日前の送別会で話したことを短くくりかえし、そして十二人の若者が馬車にのりこみました。

馬車屋は二頭立の手綱をさばきながら、中佐の合図でさえた音色で一声、ラッパを谷にひびかせました。そのとき、見送人の列からいっせいに万歳の叫びがおこり、手と旗があらしのようになりあげられました。

おどろいたのは二頭の馬です。はげしくはねあがり、右側の馬は棒立ちになりました。そして左側の馬が後足で右の馬をはりあげたものですから、馬車はじりじりとがけの方へひきずられていきます。二度、三度と万歳がおこり、車内からも答えます。馬車屋は手綱をひきしめ、みなは三方から馬をしずめようと馬車に迫りましたが、しかしそれがかえって馬を驚かせ、とうとう馬はがけにすべりこみ、ついに車体はおそろしい勢いで、がけから転落してしまいました。中佐は頭ごなしに「ばか！ このざまはなんだ。ばか！」とどなりつけるだけです。

がけ下の麦畑へ転落した馬車はこわれ、二頭の馬は足を折り、腹をかえして四肢で虚空をかいているばかりでした。さいわい死者はでなかったものの、四人の重傷者をだし、同乗した特務曹長は人事不省におちいりました。

馬車屋は警察で叱言をくらい、病院へ見舞いに出かけ、その夜どこかえ逃亡しました。

上司小剣『英霊』

この作品は一九二〇年（大正九年）七月「中央公論」に発表された短編ですが、その年二月から五月にかけておこったいわゆる尼港^{ニコライエフス}事件に取材したアクトチュアルな作品です。尼港事件というのは、ロシア十月革命で成立したソビエト政権に干渉するために日本帝国主義がシベリアへ軍隊を派遣する口実にした事件です。その事件で居留民として犠牲になった徳蔵という男が新聞で「英霊」として報道されるや、村人から神様のようにまつられるさわざになるのですが、実は徳蔵はかつて村人からきらわれた山師で前科者だったのです。反革命干渉戦争を痛烈に風刺した異色の反戦作品と思われます。

^{かみつかさしやうけん}上司小剣は堺利彦の影響で平民社の社会主義運動に近づき、また「読売新聞」文芸欄を舞台に徳田秋声、正宗白鳥などの自然主義作家たちとともに活動した作家で、とりわけ社会諷刺を基調に民衆の生活と心理をえがいて独自の作風を形成した作家です。この作品執筆直後の九月に「読売新聞」編集局長の地位を辞して作家生活にはいりました。

独身生活の古川先生は、中学の教頭をやめてから遠縁にあたる村長をたよってその村に住みつき、村の若衆に国語、漢文、英語を少しずつ教えて村人から尊敬されています。物語りは、古川先生がひどい肩こりで按摩さんのお為婆さんがくるのをまっている間、南京豆をかじりながらその日の新聞で、徳蔵が「英霊」になったことを知るところからはじまります。「有史以来未曾有の大惨劇……七百人の英霊を慰めよ」というその日の記事、そのうえ南京豆の袋には三、四年前の「生蕃百餘人に銃刑」という記事があり、それにいらいらしながら見入っています。徳蔵はかつて古川先生の記念品として愛用していた銀時計と、がま口を泥棒したこともありました。そこへお為婆さんがやってきて、肩をもみながら、古川先生を「英霊」になった徳さんの話にひきいられてしまいます。徳さんは村長の次男で地道にはたらくことのできない山師はだの男で、鉱山に手を出して失敗、米の相場で空米をつくり前科者となって、村人から毛虫のようにきらわれていたのです。お為婆さんは、娘時代に医学博士と婚約を結んでいたのですが、毛虫の徳さんに犯され、しかも悪い病気をうつされて盲目になってしまったことを、古川先生に打明けてしまいました。そういう徳さんが「英霊」あつかいにされるや、村長と役場が音頭をとって招魂祭が盛んにおこなわれます。お為婆さんは、古川先生に見えぬ目をくしゃくしゃさせながら、もしあの悪い男と寒い北国の港へいったら「これでも英霊になって、祀って貰えたんですがね」ともらすのでした。

古川先生は尼港事件や日本の植民地支配に批判的ですが、その立場からお為婆さんの不幸な境